長崎大学教育学部教育科学研究報告　第42号　79～83（1992）

幼児の遊びに関する発達心理学的研究
—台湾と日本の幼稚園児の遊びに関する交文化的研究—

進野　智子・呂　　宜真*

A Study of Play in Preschool Children:
A Cross-cultural Comparison of Preschool Children's Play in Taiwan and Japan

Tomoko SHINNO and Lu YI-JEN

要　約

台湾と日本の幼児の遊び行動を比較するために，幼稚園に就園して間もない３歳児各17名の行動が，遊びの型・遊びの種類・遊びの行動の中で見られる行動について分析され，以下のことが明らかにされた。

1．遊びの型に関しては，社会的遊びにおいては台湾と日本の幼児の間に有意差がみられず，台湾の幼児の方が日本の幼児よりも平行遊び及び一人遊びを頻繁にする事が５％以上の有意差で観察された。

2．遊びの種類に関しては，台湾の幼児が大型の遊具で戸外で遊ぶのに対して，日本の幼児は室内におけるテーブルの上での遊びが１％水準で有意に多く観察された。

3．遊び行動の中で見られる行動としては，接触を求めたり・'Automanipulation' の行動が台湾の幼児に１％水準の有意差で日本の幼児よりも頻繁に観察された。注意を求めたり・話しかけたり・見つめたり・他の子供へ接近したりする行動が１％水準で台湾の幼児よりも日本の幼児に頻繁に観察された。

目　的

幼児の遊びの交文化的研究としては，Hold-Cavell, Attili and Schleidt（1986）による西ドイツとイタリアの幼稚園就園１年目の幼児の行動比較研究が挙げられる。この研究においては，学期を追うに従って平行遊びが両国とも増加していったこと・イタリアでは社会的遊びが１学期から３学期にかけて増加していったことが明らかにされた。また，話しかける・身体的接触・微笑・自己統制・何もしていないときに見つめるのカテゴリーに

1．長崎市

2．本論文の研究をするに当たり，次の幼稚園にご協力頂きました。記して深甚の謝意を表しますと共に両幼稚園の教師・園児の皆様のご多幸をお祈りいたします。台北市私立榮星幼稚園・長崎市長崎大学付属幼稚園。

文化の違いがみられたことが明らかにされた。しかし，この研究は西欧文化圏内の比較研究である。Stevenson H.W.(1988) は，認知の発達に関して文化と学校教育の影響を明らかにするために，台湾とアメリカと日本の幼稚園児と小学校5年生について比較した。この研究においては，台湾と日本の幼児の比較がなされているが，その研究の焦点は認知発達に限られており，幼児の遊びに関しては研究されていない。Hendry J.(1986) は，日本の就学前幼児の世界を明らかにしているが，著者の母国である英国との比較研究ではない。上述のように，アジア文化圏内における幼児の遊びの比較研究はなされていない。

本研究は，就園1年目の3歳児の遊びについて遊びの型・遊びの種類・遊びの行動のなかでみられる行動について台湾と日本の幼児の比較研究をすることを目的とする。

方　法

対象児：＜台湾＞台北市榮星幼稚園[1] 3歳児17名（男児9名・女児8名）。平均年齢全児44.76ケ月・SD＝2.21，平均年齢男児43。78ケ月・SD＝1.99，平均年齢女児45.88ケ月・SD＝1.99。

＜日本＞長崎市長崎大学教育学部付属幼稚園3歳児17名（男児8名・女児9名）。平均年齢全児42.8ケ月・SD＝2.71，平均年齢男児43.1ケ月・SD＝2.32，平均年齢女児42.6ケ月・SD＝2.97。

観察期間：＜台湾＞観察者の都合により次のように2回に分けて実施された：1990年3月12日から同月24日迄・同年7月18日から8月14日迄。＜日本＞1989年4月25日から6月8日まで。

観察時間：幼児は1回につき3分間の時間見本法によりランダムに観察され，観察は1人につき18回行われた。観察されたデータは10秒単位に分析されたので，1人について324のデータ単位が得られたことになる。＜台湾＞登園して一斉保育が始まるまでの自由遊びの時間・昼寝後の時間及び帰宅準備中の遊び時間に行われた。＜日本＞幼児が登園して遊び始めたときから観察が行われた。

教育法：＜台湾＞台湾では主として一斉保育が行われており，本観察が実施された幼稚園においても，一斉保育が行われている。園児は登園するとその日のカリキュラムに従い，単位時間で内容を区切り時間割の組まれた保育を受ける。＜日本＞台湾で行われる保育が高杉・平井・森上（1989）の言うところのフォーマルな教育であるのに対して本研究の行われた幼稚園はインフォーマルな教育又は Glen Nimnicht の言う子ども中心的な保育である。

観察カテゴリー：観察された幼児の遊び行動は，子どもの遊びの型・遊具の種類・遊びの中で見られる子どもの行動について分析された。各カテゴリーの定義は以下の通りである。

［遊びの型］

社会的遊び；連合遊び（共通の活動についての会話はあるが自分の関心は集団に従属していない）と協同遊び（役割の分化・従属などのように活動が組織化されている）を含む。

平行遊び；他児のそばで同じような玩具を用いて遊ぶが，交渉は持たない遊びである。或いはお互いに一人で遊ぶが，仲間の玩具を使ったり模倣したりする。例えば，

他児が粘土で遊ぶとき同じものをまねて作る。
一人遊び；仲間には関心をもたずに一人で遊ぶ。自分の遊びに夢中になる。
［遊具の種類］
大型遊具；滑り台・ジャングルジム・ブランコ等大型遊具を使って遊ぶ。
テーブル遊び；テーブル上で，ジグソー・積み木・プラスティック製の小さな玩具で遊ぶ等の操作的な遊び，或いは床の上で小さな玩具で遊ぶ，絵を描く，絵本を読んだりする。
［遊びの中でみられる子どもの行動］
身体的接触；大人（教師や観察者・親を含む）や子どもに身体的接触をする。
注意を求める；自分に注意を向けさせるために，大声で叫んだり・泣いたり，他の子ども（大人）のなまえを呼んだりする。
接触を求める；大人や子どもに物を渡したり或いは物を取ったり，挨拶を交わしたりする
話しかける；大人や子どもに話しかける。
ふざけっこ；けんかのふりをする。
攻撃行動；他者を身体的或いは言語で攻撃する。
物の取り合い；玩具等物の取り合いをする。
大人や子どもを見る：他の子どもや大人の行動を3秒以上見る。
動く―静止；位置の移動・これに対して同一地点での停留が行われる。
Automanipulation；指しゃぶり，鼻ほじり，眼をむく，髪を撫でる，手をこする，唇をいじる，洋服をいじる等の行動。
その他；以上16カテゴリー以外の行動。

結果と考察

台湾と日本の幼児の遊び行動は，幼児の遊びの型・遊具の種類・遊び行動に関する各カテゴリーについて分析された。

各カテゴリーに関する筆者間評定の信頼性は次式によって一致率が算出された。

$$R = \frac{\text{評定者A，Bによる評定の一致した数}}{\text{評定者A，Bによる評定の一致した数＋Aの不一致の数＋Bの不一致の数}}$$

算出の結果，筆者間の一致率は0.803が得られた。

表1は台湾と日本の幼児の遊び行動の全児における比較を示す。有意差検定に際しては，カイ2乗検定が使用された。

遊びの型

平行遊びと一人遊びにはそれぞれ有意差がみられた（$x=8.705$, $df=1$ $p<0.01$; $x=4.97$, $df=1$, $p<0.05$）。台湾の幼児のほうが日本の幼児よりもこの遊びを頻繁にした。

遊びの種類

台湾の幼児は日本の幼児よりも大型遊具を使用した遊びを頻繁にし（$x=13.29$, $df=1$, p,0.01），日本の幼児は台湾の幼児よりもテーブル遊びを頻繁にした（$x=7,09$, $df=1$, $p<0.01$）これは，両国の教育法の違いに起因すると考えられる；すなわち，台湾では

表1　台湾と日本の幼児の遊びの比較　―全児―

カテゴリー	台湾 $\bar{X}$	台湾 SD	日本 $\bar{X}$	日本 SD	X^2
遊びの型：					
社会的遊び	85.41	38.54	78.64	30.70	NS
平行遊び	42.24	21.52	36.76	23.24	**
一人遊び	52.06	21.74	40.53	28.24	*
遊びの種類：					
大型遊具	57.53	49.03	10.59	16.48	**
テーブル遊び	35.00	38.50	62.06	21.99	**
遊び中の行動：					
接触を求める	8.47	6.42	1.24	2.19	**
注意を求める	5.18	3.05	20.18	8.58	**
身体的接触	18.82	12.33	22.65	21.83	NS
話しかける	44.53	33.81	120.59	33.93	**
見つめる	66.94	32.03	250.12	28.45	**
ふざけっこ	3.94	7.11	3.35	4.40	NS
攻撃行動	3.35	5.02	2.65	2.94	NS
物の取り合い	3.41	5.01	2.88	5.87	NS
動く・移動―静止	125.76	47.77	142.18	27.43	NS
他の子供への接近	19.65	6.45	41.24	18.58	**
Aatomanipulation	30.59	17.97	7.18	9.33	**
その他	15.59	8.12	61.0	40.09	**

**p<.01, * p<.05, p<.10, NS有意差なし。

観察はいわゆる「休み時間」に行われたのに対して日本では台湾における「正課」の時間中に行われたことによると考えられる。フォーマルな教育とインフォーマルな教育の違いによる幼児の遊び行動の違いと考えられる。

遊び中の行動

‘接触を求める’と‘Automanipulation’の行動が台湾の幼児に日本の幼児よりも頻繁にみられ（x=8.47, df=1, p<0.01; x=13.29, df=1, p<0.01），日本の幼児の方が台湾の幼児よりも‘注意を求める’・‘話しかける’・‘見つめる’・‘他の子供への接近’の行動カテゴリーにおいて頻繁に観察された（x=11.53, df=1, p<0.01; x=17.00, df=1, p<0.01; x=7.56, df=1, p<0.01; x=7.12, df=1, p<0.01）。台湾の幼児と日本の幼児とでは他への関心の示し方に差があることが明らかにされた。

幼稚園児の遊び行動には親の教育観が影響すると考えられる。両国の親の教育に対する関心との関係を明らかにすることが今後の課題となる。

参考文献

Hendry. Joy. (1986) Becoming Japanese the world of the pre-school child pub., Manchester University Press.

Hold-Cavell B.C.L., Attili,G., and Schleidt,M., (1986) A Cross-Sultural Comparisaon of Children's Behavıour during their First Year in a Preschool. International Journal of Behavioral Development. 9, 471-483.

Stevenson, Harold W. (1988) Culture and Schooling : Influence on Cognitive Development. In Child Development in Life-Span Perspective. (Ed. E.M. Hetherington, R.M. Lerner and M.Perlmutter.) pp.241-258., pub. LEA.,

高杉自子・平井信義・森上史朗編著　1989　幼稚園教育における指導と指導計画'89告示　幼稚園教育要領の解説と実践「3」，小学館。

注1）台北市に1963年8月に設立された幼稚園である。敷地面積は1224平方メートルである。幼稚園のクラス数は年少児・年中児・年長児各学年とも普通クラスが2クラスづつあり，各クラスの定員は30名である。年中児の学年からこの他に音楽クラスがそれぞれ1クラスづつ加わる。親の職業は，音楽クラスの場合には教師・医師・自営業・管理職・薬剤師が多く，普通クラスの場合には商業が多い。本幼稚園は商業地域に位置していて，園児は殆どこの近辺から通園している。職員は教師18名・その他4名である。遊具は，園庭には滑り台・ブランコ等の大型遊具が設置されており，教室にはピアノ・ままごと道具・積み木等の遊具が準備されている。台湾の幼児教育の形態は，児童数の多さ・幼稚園の狭さのために一斉保育の場合が多く，本幼稚園も例外ではない。ただし，時には，1クラスだけに固まらずクラスの垣根を取り払った遊びも行われている。

(1991年10月31日受理)